

博報財団 第 10 回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

※定型フォーマット有 (A4 1~2 枚)

※全て日本語で作成

氏名 (在住国名)	大野 剛 (カナダ)
所属・役職	アルバータ大学・教授
招聘回 (招聘研究期間)	第 9 回 (2014 年 9 月 1 日 ~ 2015 年 8 月 31 日)
受入機関	国立国語研究所
招聘研究テーマ	日常会話における定型表現の体系的な研究
研究目的	従来、言語を構成する語彙や文法以外の特殊なものとして取り扱われがちだった定型表現を、日本語の日常会話コーパスを質的に精査することで、各種表現の定型化の度合い、定型表現の会話における重要性を量的に確立したうえで、それをもとに使用基盤による言語理論の構築・発展を進める。研究結果は、国内外における学会・研究会での発表に加え、研究誌・研究書での学術論文として出版する。定型表現が会話において頻繁に使用される事実を踏まえ、この言語現象に焦点を与えることで言語理論のみならず、世界各国での日本語教育への貢献へとつなげたい。
研究概要	<p>：本研究は大まかに以下の三つに区分される。</p> <p>1) トランスクリプトの整備を含めた研究データの準備。現存する 50 件の日常会話のトランスクリプト (以下 Japan Corpus) を 2 倍の 100 件にするため、カリフォルニア大学サンタバーバラ校談話トランスクリプションシステム (UCSB discourse transcription system) を用いて書き起こしを行った。</p> <p>2) 音源とトランスクリプトをもとに質的なデータ分析を行った。この作業では国語研図書館所蔵の多数の辞書や、言語学、言語教育の文献を参考にしながら、コーパス内の発話を一例一例細かく精査し、分析を行った。さらにこのプロセスにおいては、国語研内外の研究者と密な意見交換がとりわけ有意義であった。</p> <p>3) Japan Corpus、さらに国立国語研究所の「日本語話し言葉コーパス」や東京外国語大学の「BTSJ による日本語話し言葉コーパス」の日常会話データを使用し、定型表現の数量化を図った。その後、出版に向けての準備として、学会等で初期調査の結果を中心とした口頭発表を行った。</p>
展望	<p>：会話の録音メディアと書き起こし資料からなるデータ整備の完了に向けて現在作業を行っている。カナダ帰国後、このデータの公開に向けて準備にとりかかる。また、定型表現に関する論文を現在複数執筆中である。来年 4 月までに、以下から 2 点を学術雑誌あるいは論文集に投稿する。さらに 2016-2017 年中に複数論文の投稿を予定している。</p> <p>1) Exploration into a new understanding of 'zero anaphora' in Japanese everyday talk</p> <p>2) The use of frequent verbs as reactive tokens in Japanese everyday talk: Formulaicity, florescence, and grammaticization</p> <p>3) Negative scope: temporality and grammatical patterning in Japanese and English conversation</p> <p>4) Fixedness and unithood in Miyako and Japanese conversation: An exploration into the emergence of structure and interaction</p> <p>5) 文法システム再考: 使用基盤言語学のすすめ</p>